

琉球大学学術リポジトリ

構築される沖縄アイデンティティ — 第5回世界のウチナーンチュ大会参加者アンケートを中心に —

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学国際沖縄研究所移民研究部門 公開日: 2018-11-13 キーワード (Ja): アイデンティティ, 沖縄, 世界のウチナーンチュ大会 キーワード (En): Identity, Okinawa, Worldwide Uchinanchu Festival 作成者: 野入, 直美, Noiri, Naomi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002010115

構築される沖縄アイデンティティ

ー第5回世界のウチナーンチュ大会参加者アンケートを中心にー

野入直美

- I. 「世界のウチナーンチュ大会」と沖縄アイデンティティ
- II. 第5回大会参加者アンケート調査の対象と方法
- III. 回答者の属性
- IV. 大会参加者の日本語能力と階層ー「脱日本語・脱貧困」への移行
- V. 沖縄アイデンティティと移民世代
- VI. 構築される“ウチナーンチュ”像
- VII. 結びに代えて

キーワード：アイデンティティ、沖縄、世界のウチナーンチュ大会

世界のウチナーンチュ大会とは、1990年以降、およそ5年に一度、沖縄県が主催して開催され、主に海外移民とその子孫たちが移民母県である沖縄に集って交流をするイベントである。2011年10月に実施された第5回世界のウチナーンチュ大会（以後、第5回大会と記述する）は、東日本大震災の影響によって海外からの参加者が減少することが懸念されたにもかかわらず、むしろ参加者7,363人という過去最大の規模で開催された。

琉球大学の研究グループは、第5回世界のウチナーンチュ大会実行委員会事務局の協力を得て、第5回大会の参加者を対象とするアンケート調査を実施した。本稿では、その調査で得られたデータをもとに、構築される沖縄アイデンティティについての分析を試みる。

I. 「世界のウチナーンチュ大会」と沖縄アイデンティティ

本稿では、第5回世界のウチナーンチュ大会で実施した参加者アンケート調査のデータを用いて、人の移動とアイデンティティの構築について考察する。データに基づく議論に入る前に、世界のウチナーンチュ大会というイベントの位置づけについて述べておきたい。

沖縄県が刊行した2011年度の『おきなわのすがた（県勢概要）』の表紙写真は、4枚すべてが第5回世界のウチナーンチュ大会の主要な場面を写したものとなっている（図1）¹⁾。ここからは、沖縄県が世界のウチナーンチュ大会をきわめて重要な行事のひとつとして位置づけていることが見てとれる。

同書の表紙解説には、沖縄県が1990年に、「本県の“人的財産”である海外の県系人と本県を結びつけ、世界的ネットワークを形成する目的で、初回大会を開催」したと記され

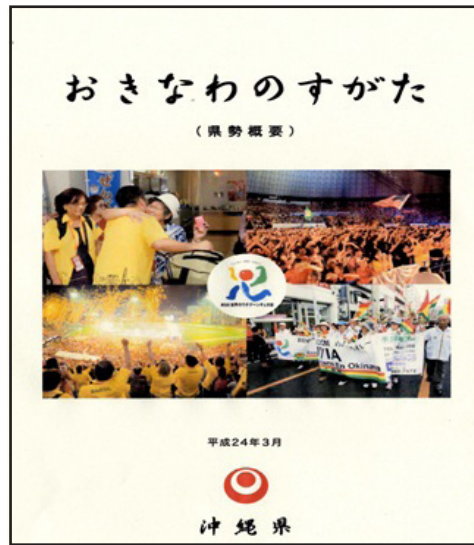


図1 『おきなわのすがた（県勢概要）』表紙

ている。海外に在住する沖縄系の人びとは、沖縄県の「人的財産」として位置づいているのである。

このような位置づけは、海外移民が始まった当初から沖縄に存在したのではない。その着想を抱いて実際に各地の沖縄系コミュニティを訪ね歩いたのが、初回大会当時に知事を務めていた西銘順次氏であった。ペルー沖縄県人会館などいくつかの海外の沖縄県人会館では、今日でも、はるばる現地まで足を運び、沖縄県と海外同胞の絆を結んだ西銘知事を讃える銅像や写真を見ることができる。

とくに世界のウチナーンチュ大会が開催された契機と見なされているのは、北米訪問である。第5回大会において沖縄県の実施本部統括次長を務めた知念英信氏は、1980年代における西銘知事の海外の県人訪問、ことにアメリカ合衆国アトランタ州での「知事を囲む大パーティー」について記述し、アトランタを「大会発祥の地」としている²⁾。そのパーティーを契機に、アトランタ沖縄県人会が結成され、その初代会長となったルイス高江洲佳代子氏は、初回大会において「世界のウチナーンチュ大会は『魂の栄養補給』に郷帰(さとがえ)りする機会である」というスピーチを行ったという。その後、「魂の栄養補給」「郷帰り」という言葉はシンボリックな意味を帯び、大会関連の報道にしばしば登場するようになった。

海外在住の人びとにとっての重要性が強調される一方で、世界のウチナーンチュ大会が、実は沖縄県民のアイデンティティに対しても意味を持つものであったことはあまり知られていない。知念氏は、初回大会を次のように振り返っている。

「沖縄が日本に復帰した72年以降、ヤマトゥムンを無批判によしとする行き過ぎた『ジャパナイズ』の風潮が進む中、（大会開催は）画期的なことであった。」³⁾

当時の沖縄県に、日本本土への傾斜に歯止めをかけたいという思いがあったことがうかがえる。世界のウチナーンチュ大会は、沖縄の独自性や豊かさを内外に向けて発信する機会として位置づいていくのである。

「初回大会は暗中模索の中で議論を進めた。ウチナーンチュの定義に始まり、何のための開催か、誰のためか、ネットワークとは、アイデンティティとは、何人が来るかなど前例も先進県もない。」⁴⁾

初回大会の準備段階において、沖縄県の実務担当者が「ウチナーンチュの定義」を議論していたという言及はきわめて興味深い。沖縄にもともと確固とした「ウチナーンチュの定義」があり、それに基づいて海外から移民とその子孫を招くイベントを企画したのではなく、この大会そのものが「ウチナーンチュとは何か」を模索し、構築していく装置として機能してきたことを示唆している。

最後にもうひとつだけ、知念氏のコメントを引用したい。ここには、これまでの世界のウチナーンチュ大会において沖縄側の実務を担ってきた知念氏が、大会に込めて県内外に発信してきたメッセージの核心が含まれているように思われる。

「16世紀ごろから、アジアの国々から交易品を持ち帰り、王国を盛んにした琉球の民にとって『海を越えて出かけ、戻ってくる』のは自然なことであった。...（中略）... 交易をスムーズに運べたのは、異国人との接触で生まれた『イチャリバチョーデー』というチムグクル（肝心）ではなかったか。大会もこのチムグクルがあるからこそ可能となり、大会への参加を「帰ってくる」と里帰りのようなものとして、世界のウチナーンチュも県民も自然な気持ちで受け止める。世界のウチナーンチュにとって5年に1度、沖縄で『魂の栄養補給』をする意義は大きい。現在、ウチナーに住む県民にとっても同じ意味をもつものであってほしい。沖縄にしかなく、沖縄が醸成してきた大会の価値に、未曾有の震災で厳しい状況にある我が国を元気にする何かがある気がしてならない。」⁵⁾

当初は、海外移民にとっての大会の重要性を象徴するものであった「里帰り」「魂の栄養補給」という言葉が、ここでは沖縄の独自性やウチナーンチュの豊かさを象徴するものとなっている。このメッセージは、海外よりもむしろ県民に向けたものであり、さらに日本をその先の射程にしていることも興味深い。「ウチナーンチュ」なるもののダイナミッ

クな構築過程が、今も進行していることを示唆しているように思われる。

本稿は、そのような動的な過程としての沖縄アイデンティティの一端を、統計的なデータを用いて明らかにしようとするものである。ここでは、沖縄の独自性やウチナー意識の強さを前提として大会参加者の意識や行為を説明するのではなく、世界のウチナーンチュ大会そのものをひとつの装置として進行しつつあるアイデンティティの構築過程を分析することが課題となる。

以下で扱う第5回世界のウチナーンチュ大会参加者アンケート調査のデータは、沖縄の独自性やウチナー意識の強さという言説をまさに根拠づけるものとして読み解くことも可能な、ある意味でトリッキーな性質をもっている。しかし、参加者全体でみれば、きわめて強固な沖縄アイデンティティという印象をもたらすデータも、移民世代の推移に着目し、さらに県内と海外・県外参加者のデータを比較するとき、一枚岩的ではない、多様で動的なアイデンティティの所在を示唆するのである。

II. 第5回大会参加者アンケート調査の対象と方法

琉球大学の研究グループは、第5回世界のウチナーンチュ大会実行委員会事務局の協力を得て、「人の移動と21世紀のグローバル社会」事業・移民研究班を中心として、第5回世界のウチナーンチュ大会の参加者を対象とするアンケート調査を行った。調査に携わったのは、金城宏幸、前村奈央佳、崎濱佳代、佐久本義生、野入直美をメンバーとする研究グループである。

この大会参加者アンケート調査は、2006年の第4回大会調査（有効回答数778）に続いて2度目のものである⁶⁾。第5回大会調査では、回答者数が1,127人、有効回答は1,045であった。

第5回大会の大きな特徴は、沖縄セルラースタジアム那覇が主要会場のひとつとなり、県民の大会参加が増加したことである。第4回大会までは、宜野湾市の沖縄コンベンションビューローが主要会場であり、公共交通機関の便が悪かったこともあって、県民が大会のイベントに立ち寄ることはあまり一般的ではなかった。これに対して第5回大会は、県民が開会式・閉会式に事前申し込み制で参加できるようになり、イベント⁷⁾にも気軽に足を運ぶことが可能となった。

第5回大会参加者アンケート調査は、このような県民参加の増加を踏まえて、海外・県外からの参加者だけでなく、沖縄県在住者にも回答を依頼した。回答者のうち沖縄在住は252人、有効回答の24.0%であった。ここには、沖縄在住の日系人や外国人が含まれており、英語による回答26、スペイン語7、ポルトガル語1があった。英語回答が沖縄在住者の10.4%にのぼっていることから、「県民参加」の内部に多様性があることがうかがえる。

質問項目は、前回大会の調査で用いたものを土台として、新たに経済効果やウチナー意識に関連する設問を加え、自由回答2項目を含む18項目を設け、英語、ポルトガル語、スペイン語、フランス語に翻訳した。言語別の有効回答数は、日本語441、英語404、ポルトガル語105、スペイン語73、フランス語22であった。

調査票は6,500部印刷され、うち5,000部は、第5回世界のウチナーンチュ大会実行委員会事務局が準備した海外参加者のためのお土産のパッケージに同封され、開会式において配布された。残りの調査票は、回収員が持参して会場で参加者に記入を依頼してまわった。さらに県内11の宿泊施設のフロント、那覇空港出発ロビー総合案内所にも数部ずつ置かせていただいた。

海外参加者のための主な回収員は、琉球大学の学生である。質問紙に、大会に参加しての感想を問う項目を設けたことから、大会序盤の数日間は調査を実施せず、大会期間の後半から回収作業を開始した。2011年10月15日に沖縄セルラースタジアム那覇と沖縄コンベンションセンターで、16日に沖縄セルラースタジアム那覇で、大会終了後の10月17日と19日に那覇空港で回収作業を行った。場所ごとの回収数は、沖縄セルラースタジアム那覇559、沖縄コンベンションセンター193、那覇空港国内線出発ロビー98、同国際線出発ロビー37、会場回収箱32、ホテル回収箱92、その他（後日郵送など）34であった。調査票の回収にあたっては大会実行委員会事務局、ニューカレドニア沖縄県人会、県内宿泊施設、那覇空港ビルディング、一橋大学・沖縄国際大学の学生・院生の協力を得た。

回収した調査票は、無記入のスペースが2ページ以上にわたっているものを無効票とし、有効票のデータの入力を行った。一次集計の結果は、第5回世界のウチナーンチュ大会実行委員会事がとりまとめた大会報告書に掲載されている⁸⁾。

2012年6月現在、外国語による自由回答の翻訳と入力作業が継続中である。

Ⅲ. 回答者の属性

大会参加者アンケート調査のデータ分析に入る前に、留意を要することについて述べておきたい。以下のデータは、海外に在住する沖縄系の人びとの属性や意識の全体像を示しているわけではない。大会参加者のほとんどは、沖縄への渡航費を賄うことができる経済的な余裕のある階層の、さらに、沖縄にやってくるだけの熱意をもった人びとである。階層やアイデンティティを分析する上で、データに偏向があることに留意する必要があることを、あらかじめ申し添えておく。

1. 年齢と性別

調査回答者のうち、もっとも多数の世代は60代であった（表1）。一方で、40歳未満の年代は、回答者の36.3%を占めている（前回大会調査16.3%）。とくに20代の回答者の

表1 年代別・性別 調査回答者数

年代	性別			合計
	男性	女性	不明	
90歳代	3	0	0	3
80歳代	8	18	1	27
70歳代	44	73	1	118
60歳代	89	123	5	217
50歳代	63	107	0	170
40歳代	54	69	0	123
30歳代	65	97	1	163
20歳代	59	104	0	163
10歳代	13	36	0	49
9歳以下	1	3	0	4
不明	—	—	8	8
合計	399	630	16	1,045

単位：人

第5回世界のウチナーンチュ大会実行委員会
『第5回世界のウチナーンチュ大会報告書』p.128 表1に加筆

増加が目立った（前回 6.8%→今回 15.7%）。前回大会の調査データと比較すると、若い世代の増加が見いだせる。

若い世代が増加したひとつの背景として、若者が主体となる新企画が第5回大会において始動したことが挙げられる。「グローバル次世代プロジェクト」では、大会に先立って「世界若者ウチナーンチュ連合会（World Youth Uchinanchu Association:WYUA）」が県内と海外の若者によって設立され、大会期間中に「若者国際会議」が開かれた⁹⁾。こうして、従来の大会における懸案であった「次世代への継承」が実質化し始めており、参加者の動向にもそれが表れているように思われる。

性別では、性別に関する有効回答 1,037 のうち、男性 400 (38.6%)、女性 637 (61.4%)であった（前回：男性 40.2%、女性 59.8%）。年代別では、20代、50代、70代において、とくに女性の占める比率が大きい。

2. 回答者の構成と移民世代

回答者の約半数にあたる 535 人は「沖縄系移民である」と回答し、103 人が「沖縄系でない移民」と答えた。沖縄県在住は 252 人であった。「その他」の 155 人には、国際結婚の配偶者や、文化や芸能などに関心を持って沖縄系の活動に参加している人が含まれていると思われる（図2）。ちなみに前回調査においては、沖縄系移民 77.4%、沖縄系ではない 16.6%、その他 5.4%であった。前回大会調査と比較すると、「その他」の比率が増している。沖縄系のネットワークに関わっている人びとの多様化が進行していることがうかがえる。

「沖縄系移民である」と答えた回答者 535 人のうち、1世(134人)は4分の1を占めている。

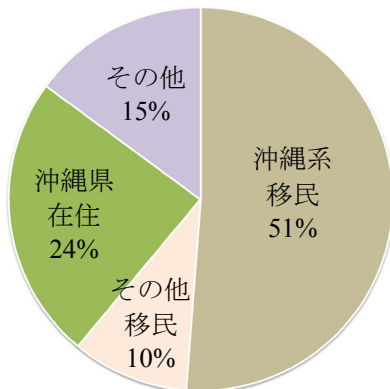


図2 回答者の構成 (N = 1045)

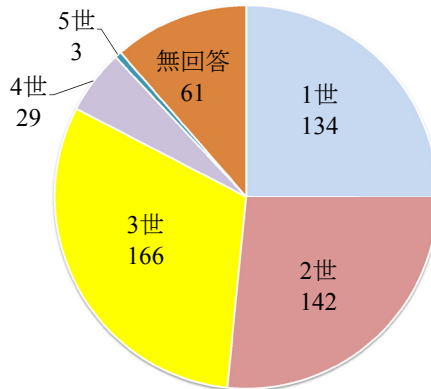


図3 沖縄系移民の世代構成 (N = 535)

最も多い世代は3世(166人)で、1世だけでなく2世をも上回っていることが特徴的である。海外在住の沖縄系の活動において、3世が核となる世代となってきたことがうかがえる(図3)。ちなみに前回調査では、1世18.8%、2世37.4%、3世36.3%、4世5.6%、5世0.3%であった。前回大会調査と比較すると、2世の占める比率の減少が見いだせる(38%→27%)。ハワイなど、沖縄からの移民の歴史が長い地域において移民2世が高齢化しており、一方でブラジルなど、戦後移民1世がまだ活動的な年代である地域からは、多くの1世が参加していると考えられる。

海外・県外からの参加者には、「沖縄系移民ではない」と回答した人も含まれている。本稿では、移民世代の推移に着目する場合にのみ「沖縄系移民」というカテゴリで集計し、それ以外は沖縄系移民でない人も含めて、「海外・県外からの参加者」として集計する。

3. 現在の居住国

大会参加者と調査回答者の居住国の比率は、おおまかに一致している(表2)。

最も多くの回答者が居住しているのはアメリカ合衆国390であり、ついで日本342(うち252が沖縄)であった。南米ではブラジル104が突出しており、アルゼンチン32、ペルー31、カナダ26、ニューカレドニア22と続いている。第5回大会実行委員会事務局は大会参加者数を、「世界24カ国、3地域から5,317名、国内招待者2,046名」としている¹⁰⁾。

第5回大会参加者数を前回大会と比較すると、南米からの参加者の著しい増加が見いだせる(ブラジル436→1215、アルゼンチン160→276など)。アメリカ合衆国からの参加者の増加傾向はより緩やかであり(2,886→2,961)、それとの比較においてもブラジルからの参加者の増加は著しい¹¹⁾。

表2 大会参加者と調査回答者の居住国

単位:人

大会参加者の国・地域と人数	調査回答者の国・地域と人数
アメリカ合衆国（うちハワイ） 2,956(1,101)	アメリカ合衆国（うちハワイ） 390(151)
ブラジル 1,213	ブラジル 104
アルゼンチン 276	アルゼンチン 32
ペルー 345	ペルー 31
その他南米 92	その他南米 15
カナダ 164	カナダ 26
アジア 137	アジア 13
ヨーロッパ 51	ヨーロッパ 4
アフリカ 3	アフリカ 0
ニューカレドニア 55	ニューカレドニア 22
その他オセアニア 11	その他オセアニア 14
海外V I P 14	
国内（県外） 2,046	県 外 90
	県 内 252
	不 明 52
合 計 7,363	合 計 1,045

※大会参加者数は第5回世界のウチナーンチュ大会実行委員会事務局調べによる。
 初出：『第5回世界のウチナーンチュ大会報告書』p.129

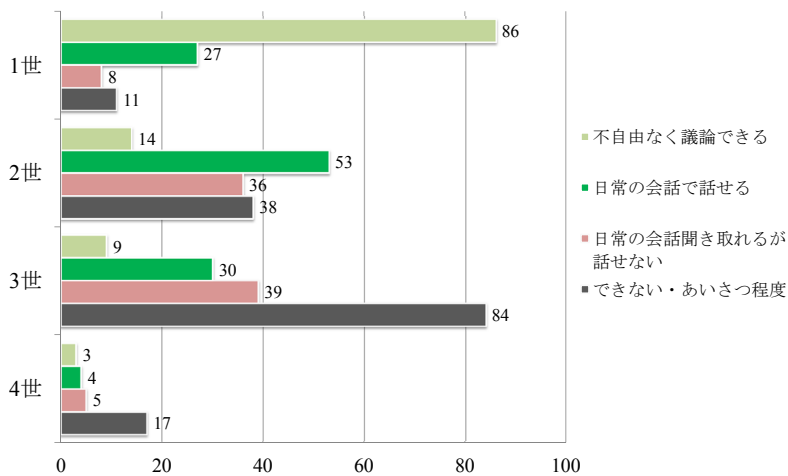


図4 沖縄系移民の世代別日本語力

IV. 大会参加者の日本語能力と階層—「脱日本語・脱貧困」への移行

世界のウチナーンチュ大会に参加している人に限って言えば、「脱日本語・脱貧困」への移行という傾向が見いだせる。海外・県外に居住している沖縄系の人びとは、世代の推移に伴って日本語からは遠ざかり、現地の言語で社会化過程を経るようになる。その結果、

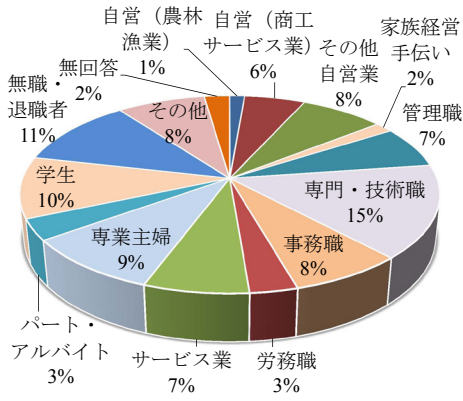


図5 回答者の職業 (N = 1045)

初出：『第5回世界のウチナーンチュ大会報告書』p. 131

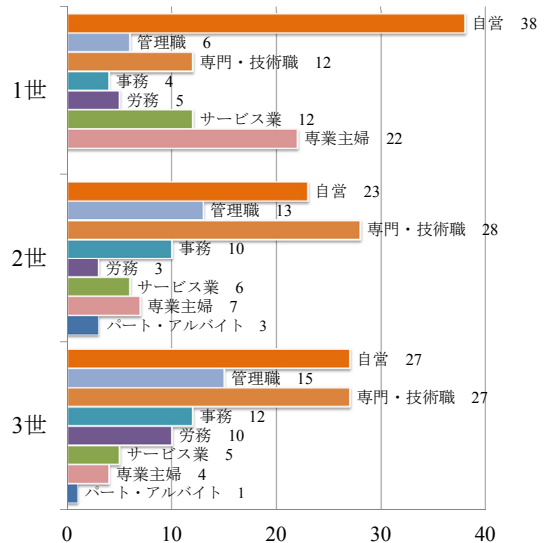


図6 沖縄系移民の世代の推移と職業

相対的に高学歴化し、専門職につく人の比率が増え、そのようにして居住国のホスト社会を担う人材となってきたのである。ただし、この傾向は海外に在住するすべての沖縄系の人びとに当てはまるわけではない。

1. 日本語能力

沖縄系移民の日本語能力は、世代の推移に伴って下がっていることが明らかになった(図4)。日本語が「できない・あいさつ程度」と「聞き取れるが話せない」という二つの回答を合計した比率は、2世では52.1%、3世では74.1%にのぼっている。世代の推移に伴って、日本語を前提としたコミュニケーションやネットワーク化は成り立たなくなっている。沖縄系移民全体では、同じ回答の比率は51.0%であった。

2. 職業と移民世代

回答者の現在の職業については、自営業(16.0%)よりも雇用者(36.4%)の比率が大きくなっている。最も回答の多かった職業は「技術・専門職」(15.2%)であった(図5)。

沖縄系移民に限定して移民世代別に集計すると、1世と2世・3世との間に相違があることが明らかとなった(図6)。4世と5世については回答者数が限られていたので、ここでは図に含めない。移民1世は「自営業」と「専業主婦」が占める比率が大きい。これに

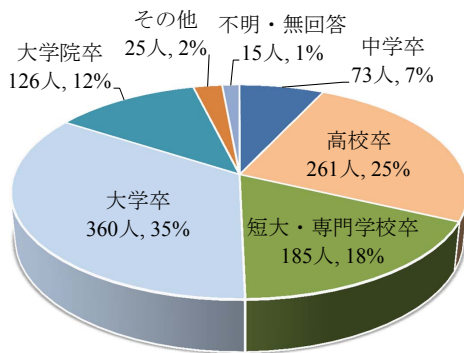


図7 回答者の学歴 (N = 1045)

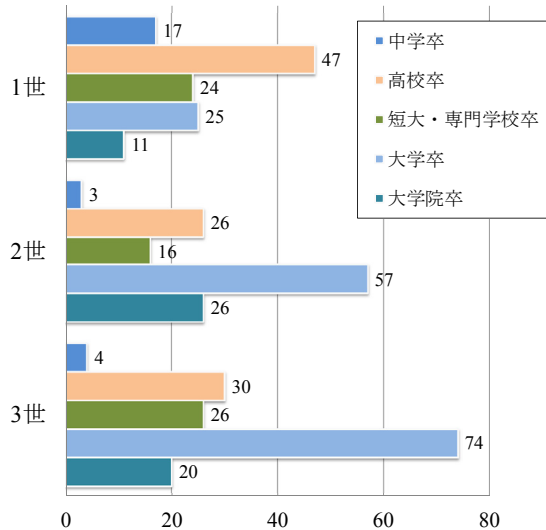


図8 沖縄系移民の世代の推移と学歴

対して、2世・3世では雇用者の比率が増大し、とくに「専門・技術職」が大きく伸びている。このことは、前述した沖縄系移民の日本語能力と関連づけて解釈することができる。ほとんどの1世は、現地語ではなく日本語を母語としているため、就ける職種が限定され、結果として自営業の占める比率が多くなっていると考えられる。ただし、設問では現職を問うているので、高齢化が進む1世については、雇用者はすでに退職し、女性は専業主婦となり、働いている人には自営が多くなっている可能性もある。

3. 学歴と移民世代

回答者全体の学歴については、大学卒以上の人の比率は46.5%であり、相対的に高学歴であることが見てとれる(図7)。

学歴を移民世代ごとに集計すると、職業と同様に、1世と2世・3世との間に相違があることが明らかとなった(図8)。移民1世は相対的に低学歴の比率が高いのに対して、2世・3世では大学進学率と大学院進学率が伸び、高学歴化が進んでいる。このことについても職業と同様に、日本語能力と関連づけて解釈することができる。現地語で社会化した世代においては、高等教育を受ける可能性が大きいのである。ただし日本語能力だけではなく、親世代が子どもに教育の機会を与えたことも大きな意味を持っている。

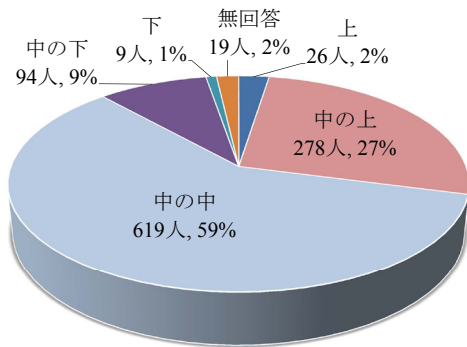


図9 回答者の階層帰属意識

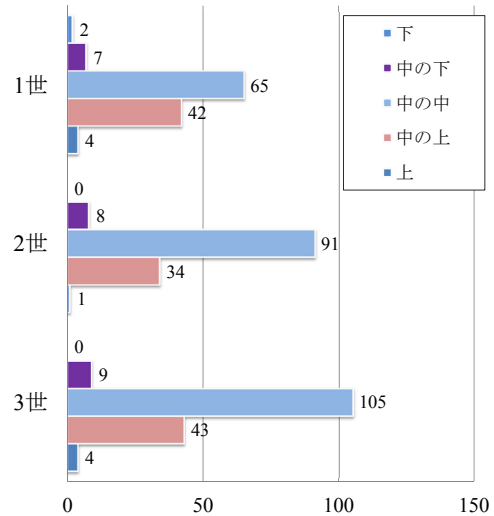


図10 沖縄系移民の世代の推移と階層帰属意識

4. 階層帰属意識と移民

「あなたが現在お住まいの社会を以下の5つの階層に分けるとすれば、あなた自身はこのどれに入るとお考えですか」という問いを設けた(図9)。最も回答が多かったのは「中の中」で59.2%であり、中流意識が優勢であった。大会参加者の多くは、相対的にゆとりのある階層であることがうかがえる。

沖縄系移民の世代別集計では、1世が2世・3世よりも「中の上」の比率が大きく、下の世代では「中の中」の比率が大きくなっていった(図10)。職業や学歴とは逆に、階層帰属意識においては、1世の方が相対的に高いのである。大会参加が可能で1世には、経済的にゆとりのある人が多いということも考えられるが、現実の経済状況と階層帰属意識とが必ずしも一致しない可能性もある。困窮の時代を体験することが多かった1世において、階層帰属意識は相対的に高くなる傾向があるのかもしれない。

V. 沖縄アイデンティティと移民世代

「ご自身を『ウチナーンチュ』だと思いますか」という設問に対して、調査回答者全体では、「とてもそう思う」・「ややそう思う」と答えた人は869人で、有効回答の83.2%であった(表3)。

沖縄系移民535人については、同じ回答の比率は94.2%であった。世代別に見てみると、

表3 沖縄系移民（世代別）・回答者全体のウチナー意識
：自分を「ウチナーンチュ」だと思うか

属 性	とてもそう思う		ややそう思う		あまりそう 思わない		まったくそう 思わない		無 回 答		合 計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1 世	122	91.0	10	7.5	0	0.0	0	0.0	2	1.5	134	100.0
2 世	85	59.9	47	33.1	5	3.5	2	1.4	3	2.1	142	100.0
3 世	100	60.2	56	33.7	3	1.8	2	1.2	5	3.0	166	100.0
4 世	18	—	11	—	0	—	0	—	0	—	29	—
5 世	2	—	1	—	0	—	0	—	0	—	3	—
無回答	39	—	13	—	2	—	4	—	3	—	61	—
沖縄系小計	366	68.4	138	25.8	10	1.9	8	1.5	13	2.4	535	100.0
回答者全体	623	59.6	246	23.5	7	0.7	84	8	23	2.2	1,045	100.0

2世は93.0%、3世は93.9%であり、ごく僅差ではあるが、ウチナーンチュとしてのアイデンティティの強さにおいては、3世が2世を上回る結果となった。

日本語能力に関しては、前述したように、世代が進むにつれて低下していることが見いだされた。一方で、ウチナー意識に関しては、世代と比例した希薄化は見られない。その背景として、移民2世と3世の沖縄アイデンティティの成り立ちの相違を指摘しておきたい。移民2世が、沖縄で生まれ育った親を持っていて、沖縄の文化や価値観をなんらかの形で<継承>する機会があるのに対して、移民3世においてはそれが乏しくなる。多くの3世にとって、沖縄の文化やアイデンティティは自然に伝わるものではなく、本人が意識的に<獲得>して初めて身につくものであると言える。そのために、世界のウチナーンチュ大会の参加者という枠組みの中で比較すれば、自然的<継承>の2世よりも、意識的<獲得>の3世において、より意識化され強化されたアイデンティティが表出しているのではないかと考えられる¹²⁾。

他方で、海外・県外の沖縄系3世全体がこのような意識を強く持っているとは断定できない。現地社会で調査をしていると、自分のルーツは知っていても沖縄に関心を持たない、活動に参加しないという人に会うことが少なくない。沖縄アイデンティティの<獲得>というハードルを越えられない、あるいは敢えて越えようとしない人びとは、世界のウチナーンチュ大会などにやってこないし、団体でアイデンティティ（の希薄さ）を誇示することもない。アピールする人びとだけを見ていると、「若い世代で強まる沖縄アイデンティティ」という理解に陥りかねないが、特に沖縄にこだわりをもたない「サイレントな沖縄系の人びと」もまた、特に3世以降の世代ではそれなりの規模で存在すると思われる。

VI. 構築される“ウチナーンチュ”像

沖縄アイデンティティについてのより詳細な検討を行うため、第5回大会調査では、「あ

構築される沖縄アイデンティティ
 —第5回世界のウチナーンチュ大会参加者アンケートを中心に— (野入直美)

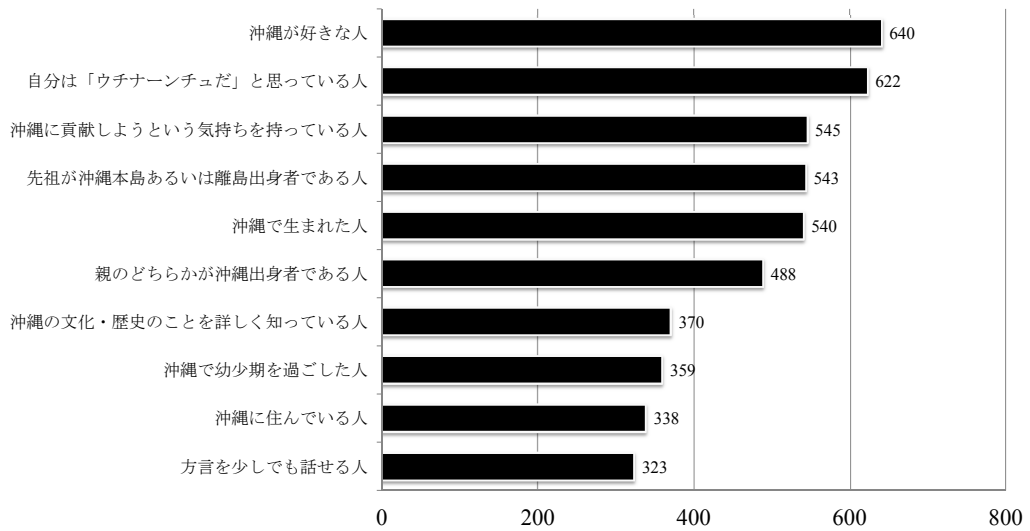


図 11 大会調査回答者全体：「あなたが考える『ウチナーンチュ』とは」（重複回答可）

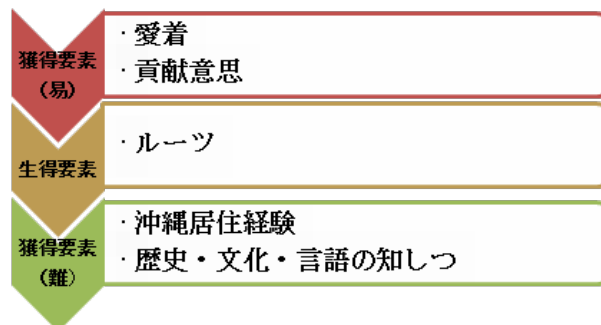


図 12 大会調査回答者全体の“ウチナーンチュ”像

あなたが考える『ウチナーンチュ』とはどのような人ですか。あてはまるものに○をつけてください」という問いを設け、重複回答可で「その他」を含めて11の選択肢から回答者に選んでもらうことにした。

この設問と、前述した「ご自身を『ウチナーンチュ』だと思いますか」という問いについては、琉球大学社会学専攻が2006年に実施した「沖縄総合社会調査」における設問を、そのまま用いている¹³⁾。沖縄総合社会調査は、沖縄本島の中南部17市町村の20～64歳男女を対象とし、有効票数885票を得た調査である。大会調査でこれと同じ設問を用いたのは、大会の海外参加者と県内在住者の意識を比較するためである。

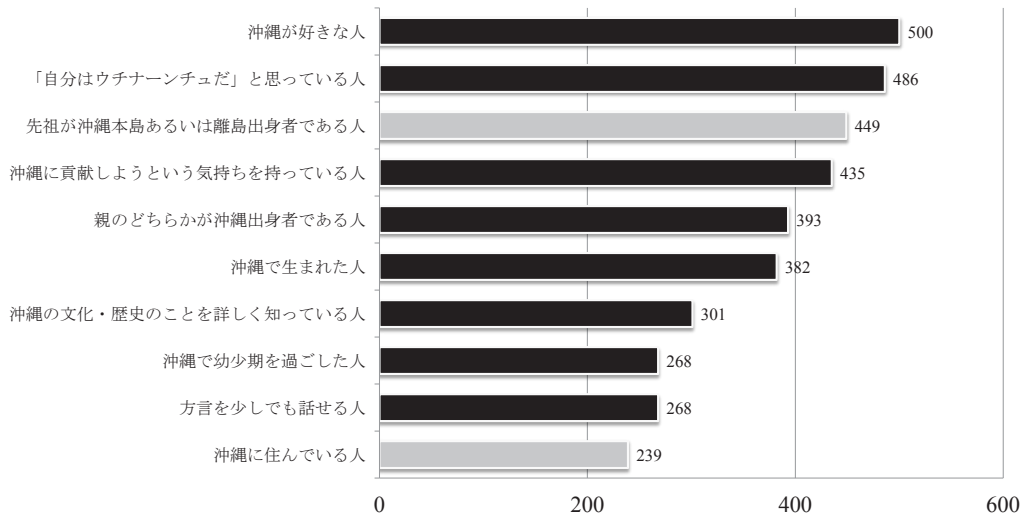


図13 海外・県外からの参加者：「あなたが考える『ウチナーンチュ』とは」（重複回答可）

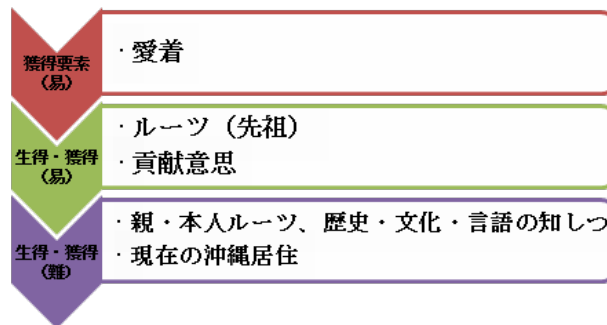


図14 海外・県外参加者の“ウチナーンチュ”像

1. 大会調査・回答者全体の“ウチナーンチュ”像ーバランスのとれたアイデンティティ構造

まず大会参加者について、回答者全体では、最も多数の回答があった選択肢は「沖縄が好きな人」であり、ほぼ同数で、「自分はウチナーンチュだと思っている」という選択肢が続いた。次いで、「沖縄に貢献しようという気持ちを持っている」、そして「先祖が沖縄出身である」「沖縄で生まれた」が続いた。最も回答が少なかった選択肢は、「方言を少しでも話せる」であった（図11）。

これらの選択肢をカテゴリーで分けると、まず「愛着」、「貢献意志」が上位に来て、次いで「ルーツ」が、先祖ー自分ー親という順で続く。「歴史・文化・言語の知しつ」は、相対的に下位にある（図12）。

「愛着」や「貢献意志」は、その気持ちさえあれば誰にでも開かれた、前提となる条件がいない要素であり、難易度の低い獲得的要素であると言える。一方で「ルーツ」は、本人によって選ぶことができない生得的要素である。そして、「歴史・文化・言語の知しつ」は、「愛着」や「貢献意志」と同じく獲得可能ではあるが、難易度は高くなっている。このように見ていくと、回答者全体の「ウチナーンチュ」像は、難易度の低い獲得的要素が上位に来て、生得的要素が中位にあり、難易度の高い獲得的要素が下位にあるということがわかる。生得的要素だけが突出することもなく、誰にでも開かれた側面を併せ持った、バランスのとれたアイデンティティ構成となっている。

2. 海外・県外からの参加者の“ウチナーンチュ”像－「沖縄居住」より「先祖のルーツ」

海外・県外からの参加者に限定して集計すると、順位にいくつかの入れ替わりが生じる。特徴的であるのは、最下位に、「現在の沖縄居住」が来ることである。「愛着」が最上位に来ることは回答者全体と同じであるが、「ルーツ（先祖）」が「貢献意志」よりも僅差ではあるが上位に来ている（図13・14）。

県外・海外居住者が、「沖縄に住んでいる」という選択肢を“ウチナーンチュ”の要件として選んでしまうと、自分自身が“ウチナーンチュ”ではなくなってしまう。海外・県外居住者は、自分を“ウチナーンチュ”カテゴリーから排除するような選択をしないのである。そして、海外・県外に住んでいても、自分が確かに“ウチナーンチュ”であることを根拠づける要素として、「ルーツ」、それも先祖のルーツが上位に来ているのではないかと考えられる。

3. ハワイからの参加者の“ウチナーンチュ”像－「先祖のルーツ」が最上位

居住地が合衆国ハワイ州である回答者だけを抜き出して集計すると、海外・県外からの参加者の回答の特徴がさらに顕在化していることが見いだせた（図15・16）。ハワイ参加者においては、「先祖のルーツ」が最上位にくるのである。そして、「現在の沖縄居住」は、海外・県外からの参加者と同じく、最下位となっている。

この「先祖のルーツ」における「先祖」とは、沖縄で生まれ育った県民が日常的に仏壇に手を合わせて対面している「先祖」とはかなり異なった意味を持つ、高度にシンボリックなものではないかと思われる。海外・県外に住んでいて、沖縄で生まれ育った経験もない人びとが、何をもって沖縄と自身との絆を実感し、他の沖縄系の人びとと共有できるかというとき、「先祖のルーツ」は、象徴的な意味を帯びて浮上してくるのである。移民の歴史が長く、沖縄系の活動の活発さにおいても大きな存在感を示してきたハワイにおいて、そのようなシンボリックなアイデンティティがより顕著に見いだせるということは、きわ

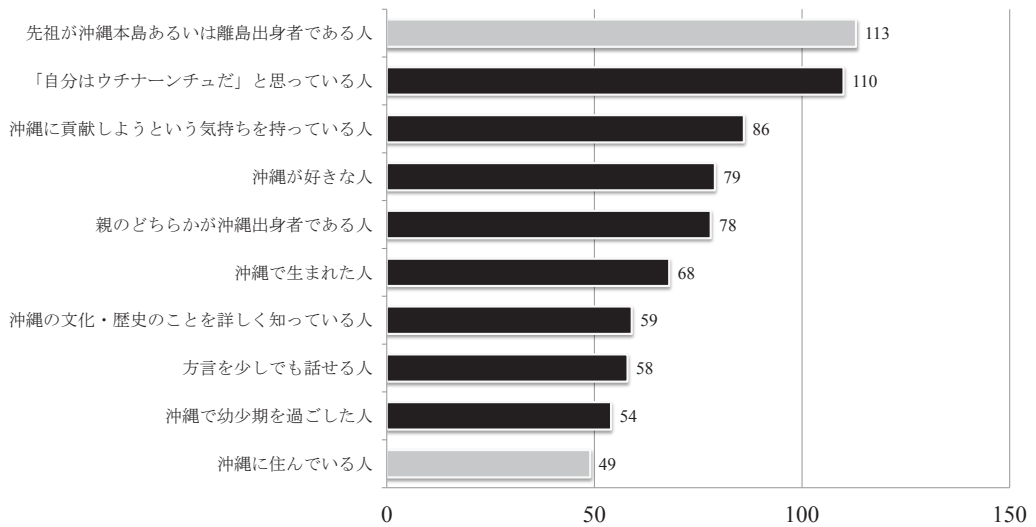


図15 ハワイからの参加者：「あなたが考える『ウチナーンチュ』とは」（重複回答可）

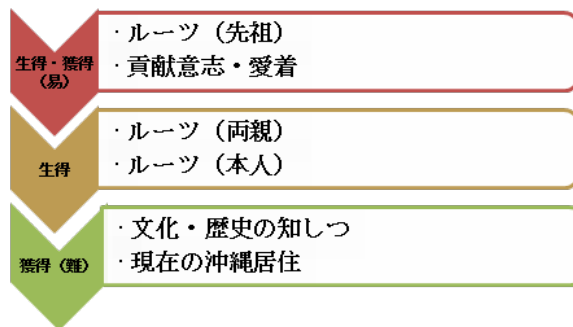


図16 ハワイ参加者の“ウチナーンチュ”像

めて興味深い。ハワイのデータは、海外・県外の沖縄系の人びとのシンボリックなアイデンティティが、先取りするように顕在化しているものとして読み解くことができる。

4. 県内参加者の“ウチナーンチュ”像－「沖縄生まれ」が最上位

県内からの大会参加者に限定して集計すると、海外・県外からの参加者と対照的な点が生じてくる。海外・県外参加者においてはどちらかという下位にあった「ルーツ(自分)」, すなわち「沖縄で生まれた」は、県内参加者においては最上位になっている。さらに、海外・県外参加者において最下位であった「現在の沖縄居住」は、県内参加者においては中位に位置づいている(図17)。

カテゴリーで見ると、まず生得的な要素がトップにあって、「愛着」、「貢献意志」とい

構築される沖縄アイデンティティ
 —第5回世界のウチナーンチュ大会参加者アンケートを中心に— (野入直美)

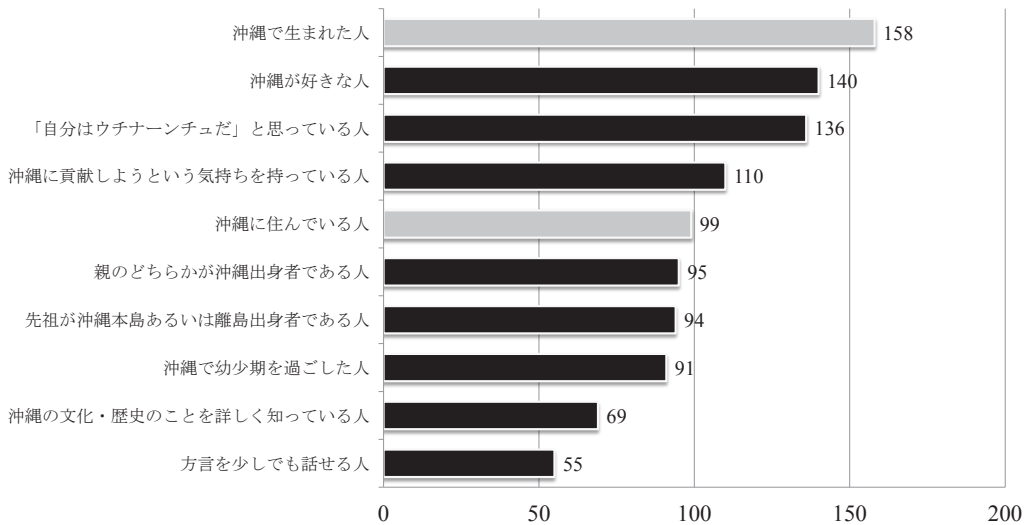


図 17 県内参加者：「あなたが考える『ウチナーンチュ』とは」（重複回答可）

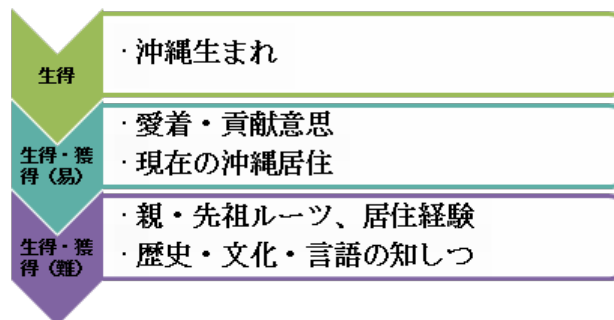


図 18 県内参加者の“ウチナーンチュ”像

う獲得的な要素が続く。「ルーツ」については、自分が沖縄生まれであることは最上位だが、親、先祖のルーツについてはかなり順位が下がっている。ことさらに先祖のルーツが重視されることがないということも、海外・県外参加者とは異なっている。(図 18)。

ちなみに、この大会調査データにおける県内参加者の回答を、沖縄総合社会調査 2006 の回答と比較してみると、両者ともに「沖縄で生まれた」が最上位であり、それ以下のランキングもおおよそのところで一致していた。ただし沖縄総合社会調査においては、「沖縄で生まれた」という回答の数が全体の中で突出しており、大会の県内参加者と比べて、生得的要素により大きな傾斜のかかったアイデンティティ構成となっている¹⁴⁾(図 19)。

以上から、海外・県外参加者と県内参加者では、“ウチナーンチュ”像における選択肢のランキングは異なるが、その構造には共通点があることが読みとれる。すなわち、どち

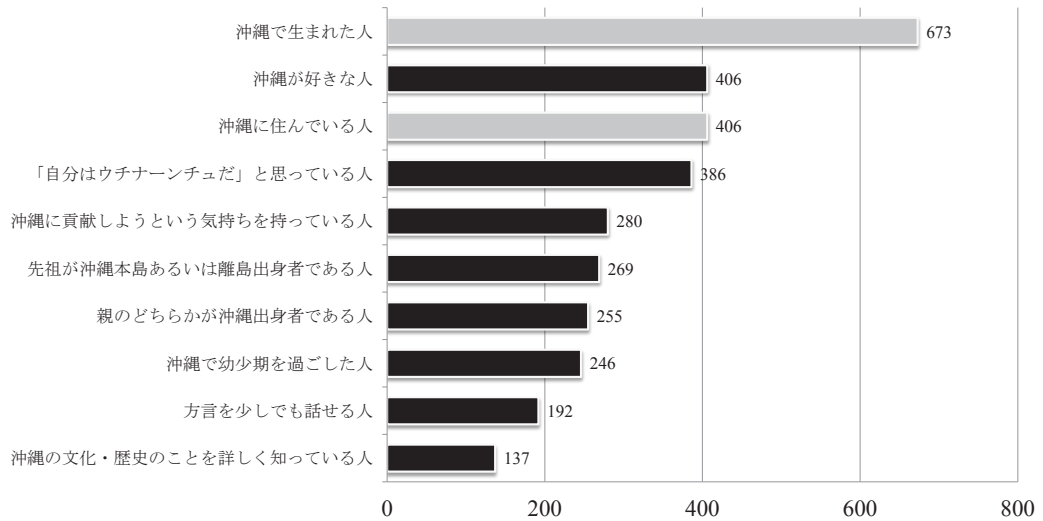


図19 沖縄総合調査2006：「あなたが考える『ウチナーンチュ』とは」（重複回答可）

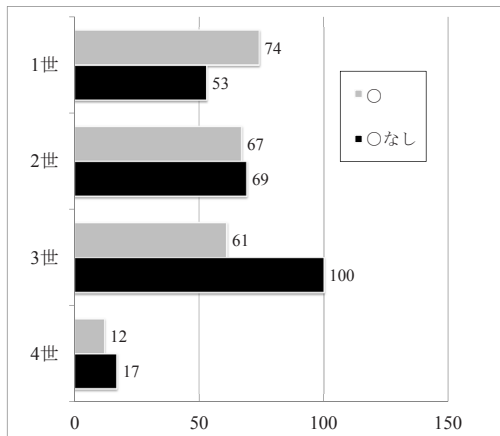


図20 「沖縄で生まれた人」：沖縄系移民の世代別「ウチナーンチュ」像

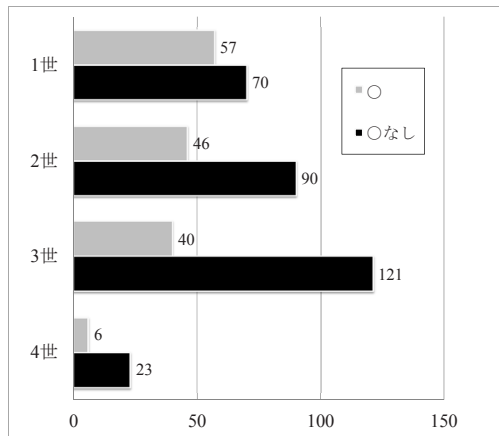


図21 「沖縄で幼少期を過ごした人」：沖縄系移民の世代別「ウチナーンチュ」像

らの回答者も、自分自身が有している要素と合致する要素を“ウチナーンチュ”として選んでいるのである。

5. 沖縄系移民の世代別“ウチナーンチュ”像

沖縄系移民の世代別に選択肢ごとの集計を行うと、自分自身が有している要素を“ウチナーンチュ”の要件として選びやすく、自分にない要素は選びにくいという法則性がここ

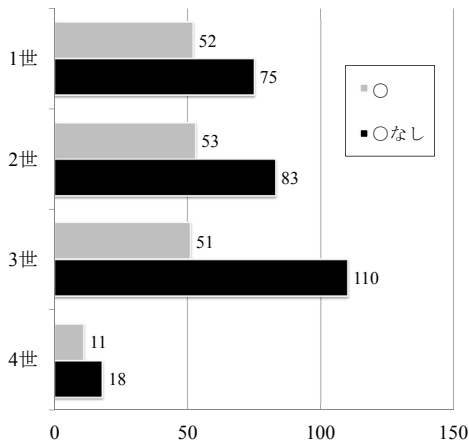


図 22 「方言を少しでも話せる」：沖縄系移民の世代別“ウチナーンチュ”像

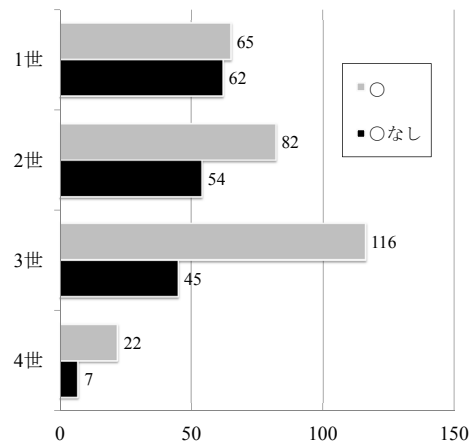


図 23 「先祖が沖縄出身」：沖縄系移民の世代別“ウチナーンチュ”像

でも見いだせる。

「沖縄で生まれた人」について、移民1世はこの選択肢を選んで○をつけた回答者の比率が、○をつけなかった回答者の比率を上回っているが、2世においては両者が拮抗している。そして、3世においては非選択の比率が選択の比率を大きく上回っている(図20)。「沖縄で幼少期を過ごした」についても、世代を追うごとに比回答の比率が大きくなっている(図21)。同様に、世代の推移と非選択の増加が比例する要素に、「方言を少しでも話せる」がある(図22)。

一方で、「先祖が沖縄出身」については、世代が進むにつれて、逆に選択の比率が増している(図23)。ハワイにおいて先駆的に表れているシンボリックなアイデンティティ表象が、移民世代の推移に伴って進んでいるのではないかと考えられる。

VII. 結びに代えて

ここでは、“ウチナーンチュ”像を構成する要素について、沖縄在住者と海外・県外在住者の回答を比較し、さらに沖縄系移民の世代別の分析を行った。それによって、回答者自身にあてはまる要素が「ウチナーンチュ」として選ばれやすく、あてはまらない要素は選ばれにくいという法則性が、ある程度、確かめられたように思われる。

県内在住者と海外・県外からの大会参加者の「ウチナーンチュ」像の相違は、ウチナー・アイデンティティにおける構築的な要素、動的な性質を示唆している。回答者は、沖縄に生まれたから、あるいは祖先が沖縄だからウチナーンチュになり、アイデンティティを持つに至ったというよりもむしろ、「自分はウチナーンチュだ」という意識を基点として、

自分が持っている要素にあてはまるものをウチナンチュの構成要素と見なす傾向にあるのである。逆に、自分にない要素はウチナンチュの構成要素として選択されにくい傾向が見いだされる。

国境を越えた移動や世代の推移によって、もともと沖縄島に固有に存在したウチナンチュとしてのアイデンティティが継承されたり変容したりするというよりむしろ、国境を越えた移動や世代の推移こそが、彼らにとってウチナンチュとは何かということの意味づけ、新たに構成してきているのではないかと筆者は考える。人の移動、ディアスポラの経験、そして大会をめぐる行為もまた、アイデンティティを構築しつつあるのである。

そして、ハワイからの参加者のデータは、今後、海外・県外に居住する沖縄系の人びとのアイデンティティがどのように変容していくのかを、先駆的に顕在化させているように思われる。移民世代の推移によって、沖縄アイデンティティは、自然的に＜継承＞されるものから、意識的に＜獲得＞されるものへと変化していく。その中で、「先祖のルーツ」などに代表されるシンボリックなアイデンティティが、いっそう重要な位置を占めるようになっていくことが予測される。

さらに、次回以降の世界のウチナンチュ大会において、県民参加がさらに一般化すれば、県民と海外・県外からの参加者それぞれの沖縄アイデンティティが相互を再帰的に照らし合い、影響を与えあう過程も見いだせるようになるかもしれない。

海外と県内の人的交流については、前述した「世界若者ウチナンチュ連合会(WYUA)」が、大会終了後も積極的な活動を続けている¹⁾⁵⁾。今後の研究課題として、大会調査データについてさらなる検討を行いつつ、大会が終了した後も持続的に展開しているネットワークにも着目し、質的データの収集を行って分析を深めていきたいと考えている。

謝辞

回答して下さった第5回世界のウチナンチュ大会参加者の皆さま、ご協力をいただいた第5回世界のウチナンチュ大会実行委員会事務局、那覇空港ビルディング、那覇市・沖縄市の宿泊施設の皆さま、学生・院生の皆さんにあつく御礼を申し上げます。

注

- 1) 写真は左上から時計回りに、再会を喜び合う人、開会式、前夜祭パレード、閉会式・グランドフィナーレの一場面を写しとっている。『おきなわのすがた(県勢概要)』2012年3月、沖縄県。<http://www3.pref.okinawa.jp/site/contents/attach/11335/hyousi-P2.pdf>
- 2) 知念英信『『魂』と『絆』の発信－世界のウチナンチュ大会考(上)』沖縄タイムス、2012年1月31日付

- 3) 知念英信『『魂』と『絆』の発信－世界のウチナーンチュ大会考』（上）沖縄タイムス、2012年1月31日日付
- 4) 知念英信『『魂』と『絆』の発信－世界のウチナーンチュ大会考』（中）沖縄タイムス、2012年2月1日付
- 5) 知念英信『『魂』と『絆』の発信－世界のウチナーンチュ大会考』（中）沖縄タイムス、2012年2月1日付
- 6) 第4回大会のアンケート調査の結果は、金城宏幸、鍼塚賢太郎、野入直美による論文として、琉球大学移民研究センター『移民研究』第4号（2008年2月）、同第5号（2009年3月）に掲載されている。<http://www.imin.u-ryukyu.ac.jp/Publication/publication.html>
- 7) 第5回世界のウチナーンチュ大会は、2011年10月12日の前夜祭から16日まで開催された。那覇市と宜野湾市を中心とする複数の会場で、チャンプルー交流祭、世界エイサー大会、琉舞・空手奉納演舞、ワールド・ウチナーシンポジウムなどが催された。第5回世界のウチナーンチュ大会実行委員会『第5回世界のウチナーンチュ大会報告書』2012年3月。
- 8) 野入直美「アンケート結果－第5回世界のウチナーンチュ大会参加者アンケートの集計結果」第5回世界のウチナーンチュ大会実行委員会『第5回世界のウチナーンチュ大会報告書』128-140頁。
- 9) 同報告書、82-86頁。
- 10) 同報告書、167頁。ここには、イベントを楽しむために立ち寄った人びとは含まれない。10月12日から16日までの開会式・閉会式含む全イベントの延べ入場者数は418,030人とされている（同報告書172頁）。
- 11) 同報告書、167頁。
- 12) ちなみに2世という世代が、貧困や差別をくぐりぬけた1世と、現代的で多様なアイデンティティを展開する3世・4世との「間（はざま）の世代」に位置づくのは、沖縄系移民に限ったことではない。金泰泳は、在日朝鮮人2世のアイデンティティについて、「1世たちの苦労を見ながら」育ち、しかし自分たちはその「1世的価値観」が揺らぐ時代に生き、1世的価値観に完全に同化することも、そこから離脱することも難しい「間（はざま）の世代」であるとしている。金泰泳『アイデンティティ・ポリティクスを超えて－在日朝鮮人のエスニシティ』世界思想社、1999年、97頁。
- 13) 安藤由美・鈴木規之編著『沖縄の社会構造と意識－沖縄総合社会調査による分析』九州大学出版会、2012年、319頁。沖縄総合社会調査における設問は、家族、地域生活、社会福祉、開発・発展、マスメディア接触など、多岐にわたっている。
- 14) 沖縄総合社会調査2006データについては、白井こころが沖縄県内出身者と県外出身者の比較分析を行っている。白井こころ「沖縄県民の社会参加活動と地域帰属意識－沖縄におけるソーシャル・キャピタルと Social Determinants of Health への考察」安藤由美・

鈴木規之編著、『沖縄の社会構造と意識－沖縄総合社会調査による分析』九州大学出版会、2012、176-177頁。

15) 世界若者ウチナーンチュ連合会沖縄本部公式ホームページ：<http://yuao.org/>

(のいり なおみ・琉球大学法文学部准教授／国際沖縄研究所併任研究員・社会学)

Constructing Okinawan Identities

“Focusing on the Surveys of the Participants of the 5th Worldwide Uchinanchu Festival”

Naomi NOIRI

University of the Ryukyus

(Sociology)

Keywords: Identity, Okinawa, Worldwide Uchinanchu Festival

Since 1990, the Worldwide Uchinanchu Festival has been hosted and organized by Okinawa Prefecture every five years. The events main purpose is to gather Okinawan immigrants and their descendants back to their motherland to have an exchange. There was a concern that due to the Tohoku Disaster the number of foreign participants of the 5th Worldwide Uchinanchu Festival held October of 2011 would decrease; but rather it increased to a record high number of 7,363 participants.

Through the support of the 5th Worldwide Uchinanchu Festival Planning Committee, the Ryukyu University research group was able to conduct a survey targeting the participants of the festival. Based on the data obtained by the surveys, I attempt to analyze the occupation/hierarchy consciousness and identity of the Okinawan immigrants.